

井上円了関係書簡集（その一）

著者	三浦 節夫
雑誌名	井上円了研究
巻	5
ページ	101-144
発行年	1986-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006778/

井上円了関係書簡集（その一）

井上円了研究会第三部会では現地調査において井上円了に関する聞き取りの他に、書簡等の資料を撮影・収集してきた。そのうち書簡についてはつぎの三ヶ所で収集することができた。

第一は井上円了の生家で真宗大谷派慈光寺で、一つの巻き物の形で保存されていて、その数は六十九通である。この中で井上円了関係と確認された書簡は五十七通である（残った十二通のうち解読不能が一通含まれている）。第二は慈光寺の壇家総代であり、哲学館の創立金を寄付した高橋家で、井上円了発信のものが一通あった。第三はすでに本誌第三号で「光賢寺所蔵井上円了宛書簡」として公表された柏崎市の真宗大谷派光賢寺所蔵の書簡で二十二通あった。以上三ヶ所の書簡総数は八十通である。ここではこの八十通の書簡を、井上円了発信、井上円

了宛、その他（間接的に関係するもの）の三つに分類し、さらに後述の凡例のように整理した。

収録にあたっては本誌が研究経過をより広く関係者に伝えることを目的としているので、原意をそこなわない範囲で原文を平易に書き下した。なお、光賢寺の書簡については、前記のように印刷されているが、その後未解読部分が解読され、また若干の誤読も訂正されたので再収録することにした。

書簡の解説については本学文学部史学科の田中健夫氏、佐藤俊雄氏、小池進氏の諸氏に多大なご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

表題に「その一」とつけたのは書簡の研究が未開拓の分野であり、今後も収集が期待されるからである。

（三浦節夫記）

目次

一 井上円了書簡

1	井上円悟(父親)宛	109
(1)	明治二十二年八月二十八日	
(2)	明治二十二年十一月十日	
(3)	明治二十四年一月吉旦	
(4)	年月日不明	
2	井上円悟・いく(両親)宛	114
(1)	一月一日	
3	井上円成(弟)宛	114
(1)	明治四十年四月七日	
4	高橋九郎宛	115
(1)	明治二十六年五月二十五日	
(2)	大正七年七月二十五日	
	(高橋家)	

二 井上円了宛書簡

1	渥美契縁	116
(1)	明治二十二年四月二十八日	
(2)	六月二十六日	
2	井上毅	116
(1)	九月六日	
3	井上哲次郎	117
(1)	九月一日	
	(光賢寺)	
4	今川覚神・藤井宣正	117
(1)	九月四日	
5	上里	118
(1)	九月二十四日	
	(光賢寺)	
6	大洲鉄然	118
(1)	七月七日	
7	岡倉覚三(天心)	119
(1)	十月三日	
	(光賢寺)	
8	加藤弘之	119

(1)	一月十一日……………(光賢寺)	121
(2)	十一月十三日	
(3)	十一月十四日	
9	嘉納治五郎……………	120
(1)	十月五日	
10	何礼之……………	121
(1)	明治(二十二年)八月五日	
(2)	明治(二十二年)九月二日……………(光賢寺)	
11	楠潜龍……………	121
(1)	七月七日	
(2)	九月十四日	
12	籠手田安定……………	122
(1)	九月二十五日	
13	小中村清矩……………	123
(1)	十月十四日……………(光賢寺)	
14	木場貞長……………	123
(1)	明治二十年九月十九日	
15	佐々木東洋……………	123
(1)	明治(二十一年)九月二十八日	
16	志賀重昂……………	124
(1)	十二月二十五日	
17	重野安繹……………	124
(1)	明治二十三年七月十九日……………(光賢寺)	
18	島田重礼……………	124
(1)	明治(二十年)	
(2)	五月二十六日……………(光賢寺)	
19	島地黙雷……………	125
(1)	二月三日	
20	釈宗演……………	126
(1)	明治(三十一年)三月十八日……………(光賢寺)	
21	釈雲照……………	126
(1)	十一月二十八日	
22	千家尊福……………	127
(1)	明治(二十二年)九月二十五日	
(2)	明治(二十二年)十一月十三日……………(光賢寺)	
23	副島種臣……………	127
(1)	明治(二十二年)十一月十三日	
24	高志大了……………	128

(1)	明治(二十一年)五月二十三日	132
25	高嶋嘉右衛門	128
(1)	三月二十三日	
26	宝田宮	129
(1)	明治三十二年一月二日	
27	滝谷琢宗	129
(1)	六月三日	
(2)	八月二十七日	
28	辻新次	130
(1)	明治二十二年十一月十二日	
(2)	明治(二十二年)十二月二十三日	
29	坪井正五郎	130
(1)	一月十四日	
30	外山正一	131
(1)	明治(二十)年八月二十六日	
31	内藤恥叟	131
(1)	明治(二十七年)二月二日	
(2)	六月二十七日	
32	中村正直	132
(1)	明治(二十五年)年	
33	南条文雄	132
(1)	大正(五)年二月七日	
(2)	八月十九日	
34	新島襄	133
(1)	八月二十九日	
35	西周	133
(1)	明治二十年一月十二日	
(2)	明治二十年八月二十一日	
36	西村円哉	134
(1)	十一月九日	
37	西村茂樹	135
(1)	明治(二十)年三月一日	
(2)	明治(二十二年)八月六日	
(3)	明治(二十二年)九月四日	
38	原担山	135
(1)	一月十五日	
39	福沢諭吉	136
(1)	三月二日	

40	穂積陳重	136
(1)	十八日	
41	三浦悟楼	137
(1)	明治(二十二年)八月七日	
42	村上專精	137
(1)	大正(五年)二月十日	
(2)	年月日不明……………(光賢寺)	
43	柴四朗	138
(1)	五月九日	
44	森有礼	138
(1)	明治(二十一年)三月二十九日	
45	吉田晚稼	139
(1)	明治(二十一年)九月十四日	
(2)	四月二日	
46	莊一郎	139
(1)	十一月十五日……………(光賢寺)	
47	渡辺国武	140
(1)	七月五日	
(2)	十月四日	

48	渡辺洪基	140
(1)	明治二十二年十一月十三日	
49	セイ正・公□□	141
(1)	十二月二十六日	
三	その他	
1	大滝伝十郎(中頸城郡教育長) 井上円成宛	142
(1)	六月二十六日	
2	青応相挫 宛名欠如	142
(1)	八月尽……………(光賢寺)	
3	平田東助 林権助・鈴木馬左也宛	142
(1)	八月四日	
4	穂積陳重 哲学書院宛	143
(1)	五月二十一日	
5	村上專精 井上円成宛	143
(1)	年月日不明	
6	福沢輪吉 真浄寺宛	143
(1)	明治二十六年三月十八日	

凡 例

一、書簡を活字化するにあたり、以下の原則にしたがつて、原意をそこなわない範囲で平易に書き下した。

一、書簡の配列順序は発信人別、五十音順とした。

一、同一人の書簡の配列は年月日順とし、年月日不明のものは末尾に収録した。推定年代は（ ）内に記したが、年代推定になお誤りがないとは言えない。

一、校訂にあたって、漢字は原意をそこなわない限り旧字体を新字体に改めた。また片仮名は原則として平仮名に統一し、変体仮名は普通体の平仮名に直した。

一、明白な誤字、脱字等や説明のために搜入したものは下に（ ）で示した。

一、書簡文の中で通例の用語はつぎの例などのように読み下した。

奉存候↓存じ奉り候

有之↓これ有り

被下度候↓下されたく候

存候得共↓存じ候えども

可有之↓これあるべく

一、本文中で判読不能の箇所は□で示した。

一、助詞の「に」「を」「と」などは必要と判断した限りで補助した。

一、句読点は原文にほとんどないが、便宜上これを附した。また、長文の場合も同様に改行を施した。

一、書簡の所蔵関係については、光賢寺と高橋家の所蔵のみを目次中に記したが、その他はすべて慈光寺所蔵のものである。

なお、「島地黙雷」の書簡（一二五頁）は、原文書全体が滲んでいるので判読不能のところが多いが、諸般の参考のために掲載したことをお断りしてお許しを願いたい。

哲字館へ金五円寄

附致之ヲスルヲ片馬

テ下サレ

八月廿六日 外山正一

井上門了宛

井上門了宛 外山正一書簡(131頁)

一 井上田了書簡

1 井上円悟（父親）宛

(1) 明治（二十二）年八月二十八日

今度の各宗管長協議会の事情により、来月上旬中と両三日の閑あらば、一夜がけの帰省することも計り難く候。其の事は后報。

今朝御親書拝読仕り候。帰省の事度々御催促に預り、私も一日も早く帰省心掛け居り候えども、何分帰朝早々多事にて哲学館も止むを得ざる儀これ有り、新築に決議致し候処、来月二十日迄に五千円入用と相成り、先日来昼夜奔走致し居り候えども、中々困難に御座候。五千円の金は実に容易ならざるものに候。其の外仏教の前途に付き非常（に）苦心罷り在り候。

政府には耶蘇教主義の人のみこれ有り、大臣参議は皆耶蘇教方と相成り候。本年憲法発布の時、耶蘇教自由と相成り、近日社寺局も相廃し、寺院の墓地取払い候様にも聞及び候。寺院の境内も取上げに相成り、本山管長廃止にも相成り、住職僧侶の名儀も廃せられ候はば、仏教は廃滅は必然に候。今日の勢にては、此の廃滅の時機も遠からず到来致すべくと存じ候。別して条約改正に相成り、内地雑居を公認するに至らば、耶蘇教は忽ち大勢力を得、仏教は無論廃滅の儀に候。明年国会開設に相成り候も国法にて、僧侶の出席権差止められ候に付き、議院出席相成らず候。然るに耶蘇教家は平民の資格に候えは、宣教師は出席権を有し候。然るに、仏教家は黙々として安心致し、人民皆憲法の恩風に浴するも、自分のみさえ風に浴するの榮を得ず、社寺局廃止、寺院取上げ目前に迫りしも、恬として顧みざるは実に睡るとや云はん。死するとや云はん。本山も僧侶末寺と共に眠り居り候、其の有り様は実に傍觀坐視に忍びざる儀に候。若し政府にて寺院仏教廃止の旨趣に候はば、何程田舎の一寺院にて勸学有教して勉強すとも全く無功に候。管長廃止に相成

り本山滅絶致し候。遂には慈光寺一ヶ寺依然として存すべき理これ無く候。日本全国の仏教死する日には、越後の仏教のみ活きる理これ無く候。本山頽るれば末寺はこれと共に頽れ候。御門主廃せらるれば、僧侶これと共に廃せらるるは必然に御座候。今や日本全国の仏燈將に滅せんとするの時なり。今や仏教惣体のために生死を決せざる者也。危急存亡の秋なり。此の憲法国会の期は万世の国基の立つ所にして、今にして仏教下風に立つときは、万世挽回する見込みこれ無く候。実に危急の時なり。九死一生の日なり。一ヶ寺一住職の為に汲々するの時にあらず。一地方一部落の為に奔走すべき時にあらず。私儀は此の仏教惣体の存廃に付き、多年苦心に罷り在り。今や九死一生の危急に相迫り候えば、必死の勢にてせめて来年国会前に何とか仏教護持の一方相立てたく、一人にて其の途に当り昼夜心痛これ有り候。若し国会後に至り候はば、とても仏教挽回の策としてはこれ無く候に付き、此の頃より其の振起法を立案致し居り。明後日、芝、青松寺に於て各宗管長代理相集め協議に附し、来月上旬には総管長の会議を開き、再応協議に及び候。其の

決議によりては政府へ大建白致す決心にて、今度の大運動は仏教の生死をと〔賭〕する運動なれば、私も一身の方向、進退生死等を顧みる暇これ無く候。田舎の一寺院の事位いは、これを二三年其の儘に打捨て置くも、別段仏教上に困難を来す程の事これ無く候えども、政府に対しての運動は、今日一たびこれを失えば、万代挽回の道なく且つ仏教自体滅絶の事に候。依て私、慈光寺一ヶ寺の盛衰を顧みざるにあらず。慈光寺住職の交替に懸念なきにあらず。然れども今日の勢いこれを懸念するの暇これ無く候。若し慈光寺檀中、慈光寺を思うの本意、仏教を愛するの意に出ずるならば、何ぞ私が今日仏教全体の為に苦心奔走するを尤むるの理あらんや。亦何程、其の檀中一同が私に迫りてこれを尤むるも、私が自分の赤心は天地に誓ふて変する事出来ず候。縦令檀家一同我れを暗殺するとも、我身を寸断するとも、余は自分の盛心は日月を貫きても変ずる事致さず候。蓋し檀家が一ヶ寺の盛衰を見て、仏教全体、今日の有様を洞察するの力なきは、其の識見の暗きによる事明かに候。私は仏教の為に一命を損するが如きは、末代の榮譽と致す所に候。

私の赤心は田舎の人に説きても、とても相分らず候に付き、是迄申したる事これ無く候。高九〔高橋九郎〕氏其他の諸氏上京ありても、世間普通の談話のみ致し居り候は、私の本心は御話し致しても御分りこれ無くと存じ候故、人並に交際致し居り候を、世間の人に此の如き事話し致しても、人は狂人の様にのみ思ひ居り候。然し夫れは私が狂人なるや、世間の人の方狂人や、判定する事難き事に候。古代にありて一宗^もおも開きたる人は其の當時の人より見るときは皆狂人に候、其の孰れが果して狂なるやは、死後の人を待ちて始めて知るべき事に候。慈光寺檀中狂するか、私狂するか、唯今にては分らず候えども、未来の人其の判別を知る事に候。右の次第に付き、慈光寺住職の事は其の儘に打捨て置き下されたく候。若し檀中にて御不同意のものこれ有り候はば、此の書状を相示し御談示成さるべく候。縦令唯今何程御協議ありても、私は前陳の次第に付き、一々御答申さず候。追〔つ〕て仏教の前途相定り候節は、田舎に入りて布教法をも相立つる見込に候えば、慈光寺の維持法、住職の相統法も取極め申すべく候。右様御承知下さるべく候。

洋行中御心配下され候事は、十分承知に御座候。其の後も年々御老衰の事も承知仕り居り候。何分、天下の仏教、今將に死なんとする際なれば、私も朝夕心痛のみ罷^るり在り候。夜分も十分眠り申さず候。其の心中の心配は山の如く海の如くに候。併し、私は今世は苦界なる事を承知仕り居り候。極楽は此の世にはこれ無く候。此の世にて苦心するは此の世の当然に候。此の世に苦あればとて不平を起す事これ無く候。私は西方の浄土を説きたるは、此の世は苦界なるゆえに候。此の理は何経にても一二枚熟読あるは明かに分る事に御座候。今更怪むには及ばず候。若し此の世を苦界として仏書を一読すれば、其の理活きるが如くに心中に感ずる事に候。若しこれを安樂世界として一読するときは、仏教を信ずる事出来ず候。迷暗の別も此の事のみに候。私は飽くまで此の世界は苦界なる事を信じ候。老少不定も盛者必衰も疑い無き実事に候。夫れ故私は生涯苦勞する決心に御座候。依て若し御老衰の御感覺も有らせられ候はば、和贊〔讚〕にても御文にても、時々御耽読あれば其の理は忽ちに相分り、宿縁のある所、来界のある事等鏡を見るが如く相分り申

すべく候。一たび此の世を苦界として来世の安養界を信ずる事相出来候えば、其の苦心は却て安心と相成るべく候。此の事御熟考成し下されたく、万望に候。

○十月には上旬中に新築開場の事施行致すべく候。左すれば中旬后ならでは帰省出来兼ね申し候。中旬后に相成り候節は、已に冷氣にも相成り候事故、私持病如何と案じ居り、信越の道中なれば別段案じ居り候。たとひ帰省致候ても開館后なれば校務多事にて後の滞在は出来ず候。一泊か二泊位に相考え候。夫れよりは寧ろ明年三月頃が好都合に候。但し当年中にも御登京相成り候はば、東京にて洋行中の事情御話し申上ぐべく候。此の儀も御考え成されたく候。多用中燈宿乱筆

八月二十八日

井上円了拝

父上様膝下

② 二言 為替は申越され候に付き、当時困難の時に候えども三十円丈都合仕るべく候。内、唯今金円少々調い兼ね候に付き、両三日中に送通すべし。

五円は

母上洋行御土産

一円 西脇妹
一円 水島同
一円 せつ

八円

為替差出人

越後三島郡浦村

東京本江(郷) 本山新町十一番

受取人 井上円悟

井上円了

(2) 明治(二十二)年十一月十日

哲学館教場急ぎ落成に付き、来る十三日移転式挙行致し候。其の外寄宿舎当年中に今一棟、食堂一棟新築に取掛り申すべく候。新築の儀、桑名舎徳太郎近日帰相致すべく候に付き、御聞取り下さるべく候。高九(高橋九郎)へは、過日寄附金の儀御話し申さず候所、右は創立の際寄附相願ひ候に付き、差控え居り申し候。併し、本日右願ひの書状同氏へ向け差出申し候。勝安房伯よりも此の間百円寄附相成り候。

政教日記は先日円成に申し付け置き、多分通送の事に

候儘に候。○先日通送の諸家書狀中、千家尊福氏の書狀相忘れ候。千家氏は当時元老院議官に候えども、以前は出雲大社の宮司にて、人の多くより知る人に候。其の外独逸にて相会し候支那人（独逸大学雇教師）の書、又文を併せて送り申し候也。

十一月十日

井上円了

父上様

(3) 明治二十四年一月吉旦

新年目出度く御無事御加歳迎えなされ賀し上げ奉り候。東京にても一同無異越年仕り候間、御安神（マツ）下さるべく候。別に名刺数葉祝年として差上げ申し候間、御配送願ひ上げ奉り候。先づは早々新年の御祝迄に御座候也。

廿四年一月吉旦

井上円了拜

父上様

二言（カ） 十二月十七日金三拾円郵便為替にて御送金申し候。定めて御泰平と察し奉り候えども、念のため御伺

い申し候也。

(4) 年月日不明

二月十四日の御書拝見仕り候。新聞の儀は前々江村氏に断り申し候。新年並びに昇階御尽力の礼状認め入候に付き、状名の所へ御届け下されたく候。長岡古橋氏は當時在京故、府下にて拝面仕り候。並びに抑（おさ）関矢橋太郎君より新年状来着し、草々返辭差出し候。高梨村山本嘉五郎氏に、府にて二三回拝面仕り候。

小生改名の儀は如何相成り候や。相成るべくは前々御周旋に相成りたく候。當時は府下時々新聞に広告し、學術の演説致し候に付き、改名の儀定まらず候ては、実にご都合に候。渥美教正は登京にて拝謁仕り候。松本先生も開拓使御用にて、北海道より上行なされ、當時在京故拝謁仕り候。高須篤先生はもと西京教校の英字教師にて、久来御世話に相成り居り候処、今度先生転仕なされ、是れ亦當時登京にて御世話に相成り候。渡辺環氏は実母の病死にて一月中に九州福岡迄帰国相成り候えども、只今

帰京に同寮に罷り在り候。来月より東京上野大博覧会これ有り候。御都合相成り候はば御上京如何なるや。右草々乱筆

父上様

円了拝

2 井上円悟・いく(両親)宛

(1) 一月一日

新禧祝上げ奉り候。御両親様御揃い御機嫌能く御超歳賀し上げ奉り候。私共当地療養以来、病氣も大いに快方に候。御安心下さるべく候。先づは御年始迄に候也。

一月一日

円了
けい

御両親様

3 井上円成(弟)宛

(1) 明治四十年四月七日

其の後御別状これ無く候也。拙者一月東京出発沖繩県へ直行、二月十九日に鹿児島へ帰り、日・薩・隅三国間に出没し、昨今霧島山下諸県郡内に滞在致し居り候。幸に無事御安心下さるべく候。

鹿児島にては「カルカン」と申す菓子これ有り。白色の「カステラ」の如きものに候。山芋にて製したるものなりとのこと。珍しき余りに今日小包にて、母上宛にて差出し申し候。若し固くなり居り候はば、湯気の中にて蒸せば柔らかになると申し居り。其の事母上へ御伝え下され候。

高橋三郎(儀)遠逝の由、昨日東京より来信これ有り。早速吊状一通相認め候に付き差上げ下さるべく候。委曲は東京より既に送り下さるべき事に聞及び候。六月中には一先ず帰京の心組に候也。

四十年四月七日

井上円成殿

井上円了

4 高橋九郎宛

(1) 明治二十六年五月二十五日

拝啓 両三日前辱き御書面有難く拝見仕り候。妻子滞在中は参堂種々御馳走に預り、且つ貴重の品御恵贈下され、一同大に悦び居り申し候。幸に無事昨日午後三時安着致し候。取敢ず右御礼申し述べ候。御寄附本月分金五円、本日哲学書院より回送相成り候。領収證包入差上げ申し候。毎度御厚情有り難く深謝し奉り候。早々頓首

明治二十六年五月二十五日

井上円了

高橋九郎様

(2) 大正七年七月二十五日

拝啓 入暑以来益御壮健賀し上げ奉り候。拙者は五月以来朝鮮十三道巡講罷り在り、一昨々日帰京。更に本日より青森県へ向け出講仕り候。慈光寺にては御陰を以て、成章目出度く真宗大学卒業候にて、尚今後宜く御引立下されたく候。

朝鮮釜山にては小倉良八氏より伝言これ有り候。無筆の為に御書面は差上げ申さず候えども、一日も御忘れ申したることこれ無く候に付き、朝鮮へ御渡航の節は、御立寄り下されたく呉々申され候。当氏は釜山成功者の一人に候。先ずは右御通知旁暑中御見舞申し候。拙者は九月十日頃には帰京仕るべく候。其の節委細申上げべく候。

大正七年七月廿五日

井上円了投

高橋大人

二 井上円了宛書簡

1 渥美契縁

(1) 明治(二十一年) 年四月二十八日

前略 然れば江州宮部円成と申す僧、若年なれども説教に長じ、稍漢籍宗案に通じ居り候間、品行は極めて端正、道心もこれ有り。尤も布教熱心の仁物に候。将来屹度^{きつと}為方に相成り候見込に候処、今度外国宗教親察の為、自費にて洋行を企て東上致し候。付ては貴兄御召連下され候はば、至極好都合に相居り候間、委細の儀は、桑門より御專命^{まこと}注下され御同道下されたし。尤も右人体の儀は小生堅く保障致し候間、御安心にて御召連れ願ひ度く候也。

四月廿八日夜

於草津 契縁

井上学士案下

(2) 六月二十六日

毎度御来向候処、折節他行中にて欠礼致し候。本日来信の趣、委曲領承。広告等の儀は差支これ無く候。右に付き御談じ申したき次第に候間、廿八日夕刻より宿路へ向い御来臨召されたく、其の節委詳相談申すべく候。先ず広告の儀差支えこれ無き旨、取敢ず貴答迄。此の如くに御座候。草々

六月 念六^(二十六)

契縁

井上雅契

2 井上毅

(1) 九月六日

拝啓 急々御面談申上げたき儀これ有り候間、明朝九時御来賀下されたく、御都合如何や。此の段相伺い候。

九月六日

井上毅

井上円了様

3 井上哲次郎

(1) 九月一日

炎暑の時下、愈御壮栄欣賞し奉り候。陳は兼て御依頼に相成り候通り、今後も参館講義仕るべき筈の処、今般学習院より教授嘱托され候間、以後貴館へは出頭^{おぼ}覚つかなき事と存じ奉り候故、一寸御通知申上げ置き候。草々

九月一日

井上哲次郎 頓首

井上円了様玉案下

4 今川覺神・藤井宣正

(1) 九月四日

余程冷氣に相成り。廿七日御発足と御報これ有り候儘、三十日には大掃除致し待ち居り候えども、何の汽車にても御帰京これ無く失望仕り候。翌日も同様夕刻吉村正造来訪、御不快の趣きにて、追て御上途との事、大いに案じ入り候。九月二日長岡発の郵便、三日朝拝見仕り候。瘡の日震えに御困却推察し奉り候。折角御保養下されたく候。御申し越し、第一条書籍の事、第二条食料の事、共に承知仕り候。下宿所の義、今日迄にも心当り尋ね候えども、適所これ無く、尚々相尋ね申すべく候。徳永君は本郷台町廿四番地鈴木守太郎方へ、沢辺小柳二君を供い下宿は板鋪なり。其の内好当の場所あれば夫れとして、別に報なくば、先ず徳永君の居へ宛て御帰着相成りたく候。随分閑静に御座候。台町の宿は新築学校の前の小路を入り、二三町程なり。小石川へ通ずる阪^{さん}の中腹に在り。今川は寄宿舎の都合にて十日に入舎は出来兼ね候。転寓云々。尚寺田君へ委曲御話申上ぐべく候。大柳君も十日頃には帰京相成る事か如何とは案じ入り候。御令弟より

大兄へ宛御帰京次第至急御来訪下されたき旨、寿町にて
——成と云う書面来り候。若し小生輩の内にて弁じ候事
なれば、御申し越し下されたと申上げたく候えども、
御下宿とのみこれ有り。宿の番地姓名もこれ無く困却仕
り候。大兄より右の趣き御申し越しに相成りたく候。寺
田・青樹両家よりも宜しくと申伝え候。先は御見舞迄。
草々不一

九月四日朝

藤井宣正

今川魁〔覚〕神拝

井上円了様

5 上里

(1) 九月二十四日

秋露鬱々敷く候処、益御多祥賀し奉り候。然れば先此
尊嘱の運動場一条に付き、御同□望候。即日松井影長へ
頼み遣し候処、近日別紙申し越し下され候也。其の尽か

き上候にては、あまり催促に及ばず方よろしきやと推察
され候也。

九月二十四日

上里

井上様

6 大洲鉄然

(1) 七月七日

拝啓 先日は御繁務中御苦勞下され、有難く喝謝し奉
り候。前寇は態々御訪問に預り候えども、折悪敷く種々
の用務差掛り居り候為め、遂に御面会も仕らず候条、平
に御容恕相願ひ申し候。今明両日中には御東上の趣き承
り、一層拝悟を待ち申すべき儀方に遺憾に存じ申し候。

其節□□の者へ御示し置かれ候儀は、追て東京表へ向い、
巨細申し進ずべき胸算に御座候間、右様御了承成し下さ
れたく候。別途晒布一疋は当山法主より寄贈致され候品
にて、老生より然るべく申上ぐべき様、親く申し聞され

候。尚御菓子はなは額はなぶる輕微の儀に候えども、当山より進上仕り居り候間、兩様共御叱勿成し置かれたく。先は御礼旁右申し進め候。勿々不具

七月七日

大洲鉄然

井上円了殿侍史

7 岡倉覺三（天心）

(1) 十月三日

拝誦 無着（マウ）茶の儀、差支えこれ無く候。御即答に候也

十月三日

覺三

井上老台

「封筒 井上円了様」

岡倉覺三」

8 加藤弘之

(1) 一月十一日

芳墨拜見、然れば十三日例年の如く新年宴会御開き候はば、御招きを蒙り有り難く存じ奉り候。必ず参上致すべく候条、此の段答え上げ候。拝復

一月十一日

加藤弘之

井上館主殿

(2) 十一月十三日

御清好珍重（に）、御座候。然れば、小生、昨日大日本教育会に於て、別紙の草稿演説致し候処、右は出版致し発布の儀は尤も教育会雑誌にも出し候事なれども、夫れよりは十分に弘まり申す間敷哉と存じ候間、是れのみ出版致したく存じ候。就ては、若し哲学書院にて出版下され候えば、大に都合よろしく、併し右御不都合に候えば、小生自分□□出版致したく存じ候。尤も余り売れるものには決してこれ無きもの故、御勘考の上、何卒御意見の通り御遠慮なく伝え下されたく存じ候、仍て別冊さし上

置き候也。

十一月十三日

弘之

井上学士殿

事にこれ有り候。右は御序に御申し聞下され候て、よろしく御申し候也。

十一月十四日

弘之

井上学士殿

(3) 十一月十四日

今朝は代理人御遣し其折委曲申したく候。教育会雑誌

丈けは、草稿のまま掲載申し候。約束其の他は、速記法にて大意を取り候分を掲載〔候〕事と許し下さるべく候。

板推済の分を教育雑誌に出し候とも、政府よりは何とも咎むる事はこれ無き哉と存し候えども、併し、成るべくは貴君より右雑誌丈には協議のうえ、掲載に許したりと申す事を内務省へ御届たくと存じ候えは、然るべき哉と存じ候。如何哉。

右草稿は、成丈け教育所の賛成を得申したくと存じ候間、成るべく出版早く御運び下され候えは、大いに有難く存じ候。出版出来のうえ、小生方へ実。価にて何部丈け御遣し下さるべき事出来候哉。貴君方にて定。則の処御申聞き下されたく、使者定。則に背き、多。く。請求は成らざる

9 嘉納治五郎

(1) 十月五日

御書面拝読。明日午後三時までに来館仕るべき様御申し越しの処、先日にも申上げ候通り、小生は三時まで公務これ有り、其の後にこれ無け〔れ〕ば差支え候故、何卒四時後に御操替下されたし。尤も火曜金曜の両日中に御座候えは、三時半よりにも間宜敷く、右予め申上げ置きたく、明日も右の次第に付き四時に参館仕るべく候。此の段御承引下されたく、右奉り候。草々不一

嘉納

十月五日
井上老兄

10 何礼之

(1) 明治(二十二)年八月五日

此の程は御帰朝の由、新紙上にて承知。万里の鯨濤往反とも何等の慶事これ無く、又祺□御清穆恭賀し奉り候。陳れば昨日は哲学館将来の御高是御寄送下され拝読仕り候。小生に於いては、満口賛成の事、更に他言これ無く、向後微身の及ぶ限り応分の義務を竭し申すべく候。委細は拝眉相声し申すべく候。取敢ず覆し奉る。草々頓首

八月五日

礼之

井上大徳望侍史中

いづれ其の内拝趨□面御将来の名論をも拝叩仕るべく候。相互罷り在り候。時下金石も鏝べくの災威は□御自愛は祈る。

(2) 明治(二十二)年九月二日

過日は御高講拝聴、感佩不斜候。かんぱいふななうず陳れば其の折鳥渡申上げ置き候通り、来る五日、星岡茶寮に於て、大内、辰巳、佐治等諸氏小集の上、晚餐差上げたく存じ奉り候間、同日青松寺御散会より大内同道に而、御枉駕下され候へば、幸甚の至りに存じ奉り候。右御案内旁。草々頓首

九月二日

礼之

南水学士机下

11 楠潜龍

(1) 七月七日

其の後は御無音に打過ぎ候。大暑中いよいよ御清適御奉勝賀し奉り候。陳れば、拙子儀近此本山相統講の儀に付き、加・能・越三ヶ国を担当罷り在り、当時金沢に出張致し居り候処、同国に於て学事の振起を計画致し、教

校左候を隆盛に致したく、精神より改良法施行に着手し候。就ては洋学教諭至急入用の処、□□の地相当これ無く、用意致し候に付き、廿五円より卅円迄の教諭名貴処の紹介にて御差向け下されたく至急御人選相願ひ候。貴所方此の度御催しの哲学書院にて、生徒御養育の方法は、実に随喜致し候。及ばずながら、地方有志成るだけ尋ね仕るべく候。別件御心附けこれ有り、二日越中富山町惣曲輪大谷派別院迄、拙者宛にて御返事下されたく候。右御依頼申したく、此の如くに候也。

七月七日

金沢にて 楠潜龍㊦

在東京 井上円了殿

(2) 九月十四日

教諭の儀に付き、過般来御手数を煩し為□厚謝奉り。然る処、金沢の儀は少々教授に_二欠_一(異)動を生じ候より、その替り決定致し兼ね候。越中高岡の方は去る十一日開校式を行い候、教諭招聘の儀粗に相決し候処、館俸の儀に付き今一度一国の協議を遂げ下さるべく候。後日を憂

い候儀に付き、明十五六日集会相開き、一定の上は此の間御申越しの約定書に基づき、早速相願ひ候事に申し入れ置き候。□校より御依頼申上げ候はば宜敷相願ひ候。毎度御手数相掛け候通り、有り難く何れ御礼申し上ぐべく候也。

九月十四日

金沢西院にて 楠潜龍

井上円了様

12 籠手田安定

(1) 九月二十五日

拝啓 先日は御尋ね下され候処、多忙の際甚だ欠敬致し候。其の節御約束申し候字館参観の義、明廿六日少閑を得候に付き、午前に西ヶ原試作場に至り、帰途貴館に罷り出ずべく候間、御承知置き下されたく、右貴意を得候。勿々不悉

九月二十五日

籠手田安定

井上円了殿

13 小中村清矩

(1) 十月十四日

拝展 過日御音臨の節、御囑御坐候臨時講義の日取の事、伝え越され了承仕り候。二十八日は差し支え御坐候間、廿九日午後二時より参館仕りたく、此の旨御答え申上げ候。敬具

十月十四日

小中村清矩

井上円了様坐下

14 木場貞長

(1) 明治二十年九月十九日

貴兄御著述倫理学の儀、師範学校用教科書として検定方御願出の処、願の趣き聴許し難き旨、今般指令相出で候由。然るに倫理学の事に關しては、森文部大臣に於いても持論もこれ有り、貴兄へ面談致されたき儀もこれ有り候由に付き、御都合宜しく候、近日中火曜日を除く永田町森氏邸へ午前九時頃より十一時頃の内御来車、親しく御話相成り候ては如何にこれ有るや、大臣の命に依り、此の段私信を以て貴意を得候也。

明治廿年九月十九日 文部省 木場貞長

井上円了殿

15 佐々木東洋

(1) 明治（二十年）九月二十八日

尔来御無音仕り候。陳れば過日には哲学館開場の招標

御送附下され候所、折悪く不快出頭仕らず欠礼御海容是待つ。昨日者又々華翰を辱けなくし、帰宅拝披候節は既に深更に及び居り候間、今朝右寄附金拾円持たせ差し出し候、御落掌下されたく、先は要件候。御時を期し候也。

九月廿八日

佐々木東洋

井上円了殿

16 志賀重昂

(1) 十二月二十五日

謹啓 陳れば少々御依頼申したき義は、彼の露国東洋軍略の翻訳の印刷に附して、世に公にさせるもの未だ御手元にこれ有り候えば、此に即ち長井行蔵氏に御譲り下され間敷候哉。実は非常に御所望せらる品となれば、何卒御聴納下されたく。此の段小生より願上げ奉り候也。拝具

十二月二十五日

志賀重昂

井上円了 殿侍史

井上円成

17 重野安繹

(1) 明治二十三年七月十九日

肅啓 過日差出し候碑文、拙稿少々刪正致し、別冊相副進閱候間、前牘^{とく}申し述べ候通、御隔意無く御指摘相成りたく、此の段更に御意を得候也。

明治廿三年七月十九日

重野安繹

井上円了賢契尊梧下

18 島田重礼

(1) 明治(二十)年

謹啓 今日開館式に付き御寵招下され海岳感謝候も必ず参上の積りに御座候処、夜来時候障りにて何分出席得兼ね候間、遺憾乍ら御断り候も、先は右返答に候。敬白

島田重礼

井上田了君

(2) 五月二十六日

昨日は御来訪下され候処、折節出勤前、失敬御海涵下さるべく候。筆記大いに延引候。御使いより御渡し申し上げ候。塗抹甚しく候間、然るべく御推読申し下され候。草々

五月廿六日

重礼

井上様

19 島地黙雷

(1) 二月三日

拝啓 愈御清祥御儀、□□□□方御座無く候。□先御
放念の処扱□事□事に取紛れ御見舞い状も差上げず候。

更に御氣如何候哉。何分万金の重距□に御加□詮要に御座候。藤井宣正より□□へは本年始めに少し咯血これ有り候由、甚だ痛心申し候。愚案には左兄□り勉強に過ぎ□致さず候哉。何分弱質の軀軀は余程使用に^{ヘイ}斟酌これ無くては千悔及ばず事これ有り候。弟の旧友に光田為然と申す者これ有り。有為の志也。勉強度に過ぎ独逸にて病み付き帰朝後□□と相成り申すこと、世間□□後□甚だ及し□鑑遂げず、先ず当分は御□療專一に成されたく候。□□□□に付き保障金の事外に好□なし。由て小生当分御并申すべく候間、御安心下さるべく候。

扱て小生も該雜誌発起人の一員に相加わり、差し支えこれ無く言へは御加え下さるべく候。右は辰巳氏へも申

し遣し置き候間、☐而御☐答申し候。時下☐☐被為☐御保重☐。恐々禱

二月三日

嘿(默) 雷拝

井上円了様

井上円了博士

21 釈雲照

20 釈宗演

(1) 明治(三十)年三月十八日

拝啓 御投了の芳翰敬誦御申間の趣き、委細領承仕り候。陳れば今般御館内に於て、新に仏教修專科を置き、増斯道^(マ)を發揮相成され候段、真に随喜の至りに存じ奉り申し候。就いて右講義録発刊の祝詞仕り候に参上。一首の村詩別業^(マ)のめ☐相綴申上げ候。素より不調法の野僧、千字に慣わず、慚愧の至りに御坐候。唯取捨御高意の儘に御坐候。先ずは取敢ず卑答草略。是の如くに御座候。敬具

三月十八日

釈宗演

(1) 十一月二十八日

昨日は面晤大悦仕り候。拙随なる講義大に貴重の時間を妨げ候。講義録の事甚だ不都合重ねて御目に懸け候儀慚愧に候えども、御望みに任せ送り候はば、文言繁重なること多く、且つは肝要なる語句をも脱し候事もこれ有るべく候間、貴覧の上、更に御訂正に成し下し、繁を除き闕を補し語路通暢候様、御添削の上御記載成し下されたく、此の段特に御依頼仕り候也。

十一月廿八日

雲照 合掌

井上円了殿

22 千家尊福

(1) 明治(二十二)年九月二十五日

拝啓 過日は尊著二、御恵贈下され、御厚意の極奉謝
〔の〕至りに存じ候。早速御礼申すべく候処、種々取紛
れ欠敬打過ぎ候段、悪しからず御承知下されたく候。教
法上色々心配の趣き追々都合に相成り候様存じたくも
のに御座候。扱て政教日記日本政教論他へ遣したく候間、
沓冊づつ申し受けたく候間、御手数ながら哲学書院より
鍾^{つづ}送るべき儀これ無き様御申し伝え下されたく御頼み
申し候。先は過日の御礼旁此の如くに候。勿々不宣
追て過般来参座御答礼申したく存〔じ〕候えども、兎
角雑事に取紛れ御無沙汰致し候。当晦に相成候はば、
必参座緩々光来の事御相談申したきものと存じ候也。

九月廿五日

千家尊福

井上円了様

(2) 明治(二十二)年十一月十三日

拝啓 来る十三日、哲学館移転式并に郁文館開校式御
執行に付き、参館御招き御懇書を得候処、同日は同校中
委員会相開き候儀これ有り遅□思間、様々候えども参館
致し難く候間、悪しからず御承知下されたく、先々御懇
請の厚意を謝し、併せて不参の御断り斯の如くに候。勿々
頓首

十一月十三日

千家尊福

井上円了殿

棚橋一郎殿

23 副島種臣

(1) 明治(二十二)年十一月十三日

拝啓 本日哲学館御移転式、並びに郁文館開校式御執
行に付き、小生も参向仕るべき様御案内□然拝趨すべき

旨の処、今朝体氣不暢にて其の儀、不□所存、残念乍ら御断り申上げ候。此段悪しからず御おぼしめし給うべく候。謹言

十一月十三日

副島種臣

井上円了様

24 高志大了

(1) 明治(二十一)年五月二十三日

拝啓 薄暑の節、愈御堅勝御座在らせられ恭賀に候。過般は御書面に預り、且亦其の後も御尋ねに預りしに、御た〔他〕行の由にて拝謁を得ず、御散歩の御帰かけ御立寄にも相成り云々に付き、御待ち申上げ候処、直に御帰館相成り候由、此よりも是非一度御尋訪したく心頭に懸り居り候えども、過日中風邪にて引籠り其の後事務に遂はれ、且宗用に付き派出致したり、合手なから意外なる御無沙汰仕り候。近日の内洋行成され候事、新聞に

て承知、御繁忙の事と察し奉り候。今日にも参館拝謁致したきなれども、廿日早天より栃木県下へ派出、昨夕帰寺故、明廿四日早天より往返十五日間程北越へ派出、六月十日頃迄には帰京致し候。御発途其の後に相成り候はば、参館拝謁の幸を得べく候、本日は来人もあり、支度く等にて伺事を得ず迷惑千万なり。右不本意なる失敬の処、愚書を以て謝し奉り候。頓首謹言

五月廿三日

高志大了

井上円了殿

25 高嶋嘉右衛門

(1) 三月二十三日

御状展読。御来命の件承り、当方へ御来訪下され候義は、本年内は大抵在宅仕り候えども、若し御来奉〔訪〕下され候節は、木挽町五丁目高嶋徳右衛門方へ御立寄り、在宅か出京かを御問合せの上御越し下され候はば、徒勞

はこれ有る間敷、此の段申上げ候也。

三月廿三日

高嶋嘉右衛門

井上円了様

(1) 六月三日

曹洞宗高僧

宗祖 道元 二代孤雲慧辨 三代徹通義价

大本山総持寺開山

瑩山超瑾 峨山韶碩 明峯素哲

寒巖義尹 通幻寂靈 太源宗真

無端祖環 大徹宗令 実峰良彦

梅山聞本 了菴慧明 石屋真梁

右は寛元以来応永年間迄の人

鉄心道印 独庵玄光 月舟宗胡

己山道白 天桂伝尊 面山瑞方

右は徳川治世元禄より延宝返の人

拙納儀、五月廿七日より他行、今日帰宅。然るに去月

廿八日附の御書面に接し、早速右の姓名申上げ候。爾余

の儀は追て調えさせ置くべく候。早々

六月三日

滝谷琢宗

井上円了様

(1) 明治三十二年一月二日

「何卒く先生御説教のせつ、此の保。会。法。の事を、ひ
ろく御披露をひたすらく願ひ上げ申し奉り候。

世二年一月二日

宝田宮印

井上円了先生机下

27 滝谷琢宗

(2) 八月二十七日

過日御高諒の儀、愈来る三十日午後二時より愛宕下「春駕」に於て御集会の趣き、特に御通知を蒙り敬承致し候。然るに同日は午後三時より執事を引連れ他出の事に相成り、甚だ遺憾の至りに候えども、御集会了畢迄御高僧の後に列する能わず、去り乍ら午後二時より「春駕」へ推参、三時迄は御高説を承りたく存ぜられ候、三時以後は御暇乞い願ひ上げ候に付き、此の段御含み置き下されたく候。敬復

八月廿七日

滝谷琢宗

井上円了殿

28 辻新次

(1) 明治二十二年十一月十二日

貴翰拝見。明十三日本郷区駒込蓬萊町廿八番地に於て、

哲学館移転式并に郁文館開校式執行相成り候に付き、御案内の趣き承領いたし候、依て同日参場相仕り候。拝復

明治廿二年十一月十二日 辻新次

哲学館主 井上円了殿

(2) 明治(二十二)年二月二十三日

拝啓 貴著の政教日記御送与下され、鳴謝まかり在り候。右は便利の品にて珍藏いたし候儀にこれ有り候。右御挨拶まで、斯の如くに御坐候。拝具

十二月廿三日 辻新次

井上円了様

29 坪井正五郎

(1) 一月十四日

さくばんはいろ／＼ごちそうありがたう。また、おみ

やげばなし、おもしろくうかゞひました。りやくぎながら、てがみをもつて、おれいをもうしあげます。

一ぐわつ十四か

つぼろしやうごろう

ゐのうへえんりやうくん

30 外山正一

(1) 明治(二十)年八月二十六日

哲学館へ金五円寄附致しますから、そう思召て下さいます。

八月廿六日

外山正一

井上円了様

31 内藤恥叟

(1) 明治(二十七)年二月二日

東洋哲学会と御改称相成、雑誌も右同様御改号に付き云々、拝承仕る儀に候。我国体御研究は日本人にとりては尤も必要の儀と相考え、既に円了先生忠孝活論に於て其の端を御開き申し候上は、御参考にも成らるべき儀に、国体發揮一部拝呈仕り候。願くは右に付き御研究の為、其の雑誌上に掲載、毎条に付き一々御批評を願いたく候。此の段願ひ奉り候也。

二月二日

内藤恥叟

井上円了様

(2) 六月二十七日

快晴己来輕暑相催し候所、いよいよ御壮健(に)存じ上げ奉り候。扱て破邪の一件に付き、段々御苦勞願いたく候。写物出来候で更に編訂仕り、

○顕正破邪論集と名づけ、凡そ二百五十ページ位の一冊に仕り候て、御発考を願いたく候。尤も実費は小生よ

り指上げ候て渡さるべく候。右御承諾致し下さるべく候。
一、先日中より追々御かし申し上げ候書面、未だ御返却
これ無き分も御座候。右は急ぎ仕らず写し済み次第に返
却願われ候。

一、同友山下重氏と申す人、別紙天則か又は然るべく御
採納願いたく候間、指上げ申し候。これは前に出す。
一、破邪叢書之御集成は如何に候や。先々第初編より御
取掛かり然るべき御儀と存じ奉り候条、早々申し上げ候。
以上

六月廿七日

内藤恥叟

井上円了様尊名

32 中村正直

(1) 明治(二十五)年

寺田福寿君より贈られ候真宗□□(哲学)と申す書を、
取落し候間、御手数乍ら此者に御渡し下さるべく候。以

上。即時

井上円了様

中村正直

33 南条文雄

(1) 大正(五)年二月七日

拝復 御令弟円成様御儀、御病気の事も一向存知申さ
ず、御無沙汰にのみ打過ぎ候処、本月一日遂に御逝去相
成り候由、御通知下され驚き入り申し候。御愁傷の御事
と御同情の至りに御座候。早速御長男へ宛御悔み状差上
げ置き申し候。尚御節哀の程企望仕り候。唯今齊藤唯信
君に遺書を渡し、月見覚了君へ回し呉れ下され候様申入
れ候。明治十八年以來の御知り合い申すにこれ有り候処、
此の訃音に接し一増悽愴の情に堪え申さず候。況や御同
胞の間に於てをやと存じ候。先ずは御悔み申し進め候。
以上

二月七日朝

南条文雄

井上博士殿

〔京都 真宗大学より〕

(2) 八月十九日

次に令知会雑誌の事は委曲平松氏へ申し入れ置き候。
当地も過日来残暑甚だしく候処、昨夜来雷雨の為め遽かに氣候の変を生じ申候、猶御帰京の上万縷承り申すべく候。今一事如來論の当学生資金の事は多分公平の処置これ有り候筈に御座候。先は用事のみ。草々不具

八月十九日

南条文雄

井上円了様

34 新島襄

(1) 八月二十九日

過般御懇書を賜わり、哲学館将来の目的を御示し下され候間、早々御回答仕るべき筈の処、小生事旅行中にこれ有り、不本意遅延に及び候条、御海涵下し賜るべく候。陳れば御来示の御意見拝読仕る如く、斯くも銳意、大学に御企てあるは大いに感服仕り、且当時其の必要を感じ居り候際なれば、殊更其の拳に御賛成申上げ奉り候。小生は常々是迄も民間に義氣を抱き候様、この拳に着手せし者無きを遺憾と存じ居り候。去りながら茲に一応の御注意を仰ぎ度き事は、折角御創立に相成るべく大学とあれば、成る丈けコスモポリタン、ユニヴァルシティーと相成る様切望する所に御座候。右貴答として。勿々拝具

八月廿九日

新島襄

井上円了様侍史

35 西周

(1) 明治二十年一月十二日

恭賀新禧 陳れば嘗て御話御座候哲学書院の事、御設置相成り候段、新聞上にて拝見仕り候。本日芳翰委曲拝承賀すべく慶すべく事と賛成致し候也。就いては今後拙著の類にてもこれ有り候節は、貴院へ託し発行相謀り候様に御申越しの義、嘗て拝晤の趣も申上げ候通り、是れ又委曲承諾の事に御座候。只如何せん遂年老朽相増し、目今忽ち高需に応じ候ものこれ無く、貴院へ御依頼申すべくと存じ候間、左様御承知下され度く、右まで御答早々此の如く候也。頓首

二十年一月十二日

西周

井上円了様侍史

(2) 明治二十年八月二十一日

愈御清適桂賀の至りに存じ候。先達ては松魚節御開館の御祝い御贈恵下され辱けなく存じ候。折節旅行中謝答延引、万御諒察下さるべく候。然して嘗て御約申し候金

三円呈上仕り候間、御受收下され候。御礼旁^⑤早々此の如くに候也。

八月二十一日

西周

井上円了様

36 西村円哉

(1) 十一月九日

拝啓 其の後は意外に御□□段々無敬御海容成し下さるべく候。扨て東京へ御帰りはいつ比「頃」にいか候哉。相成るべくは其の前拝芝を得たく存じ奉り候。何日比「頃」迄御滞留遊ばされ候哉。願わくは其の中御一泊かけ拙家へ御光来願上げ奉り候えども、若し御光来相成り難く候はば、余儀無く誰か差し上げ申すべく候。右其の意を得たく此の如くに御座候。草々頓首

十一月九日

西村円哉拝

円了大学士浄座下

37 西村茂樹

(1) 明治(二十)年三月一日

御著述の仏教活論御恵投下され忝く存じ奉り候。此の節眼病にて読書六ヶ敷候間、全快の上緩々拝見致すべく候。右御礼迄にかくのごとくに候也。

三月一日

西村茂樹

井上円了殿

(2) 明治(二十二)年八月六日

御書面拝見、大暑に候処、愈御安東賀し奉り候。然れば今般欧米御巡遊の上にて、本邦の学問を基本として答ふるに、外国の学問を以て尊とぶ御定見御立成され候事、至極御尤もの御事と志せり。十分御同意を表し申し候。其の内追々御計画も有るべく候。何卒此の主義の大

学校の国中に成立せんをば志せり、希望に堪えざる処に御座候。併し大学校と申し候ては頗る大事業(事業の大事よりは、事は金を要することの大事なり)候間、前達十分の御富力を希望致し候。先は貴答御同意を表する可為に貴答此の如く御座候。勿々拝具

八月六日

西村茂樹

井上円了学士

(3) 明治(二十二)年九月四日

貴著欧米政教日記御恵投下され御厚志謝し奉り候。定て好候、益の書にこれ有るべくと存じ候。その内拝読仕るべく候。御礼迄、如此に奉り候。勿草頓首

九月四日

西村茂樹

井上円了学士坐下

38 原担山

(1) 一月十五日

昨日は小生不在中御状の趣き承諾仕り候。扱て別紙の書狀到来の処、小生洋語を不解し困却致し候。手数乍ら傍らに訳語を附し、御戻し下されたし。則ち郵券相添え御依頼託し仕り候也。

一月十五日

原担山

井上円了殿

39 福沢諭吉

(1) 三月二日

拝啓 愈御清福賀し上げ奉り候。陳れば今日は御近著の二書、態々御恵投下され万謝し奉り候。寛々拝読仕るべく候と相樂しみ居り候。右取敢ず御礼迄、略筆申上げ候。勿々

三月二日

福沢諭吉

井上円了様

「封筒 東京本郷区駒込蓬萊町哲学館 井上円了様親展
芝区三田九丁目 福沢諭吉」

40 穂積陳重

(1) 十八日

文学会雑誌の義、未だ貴君へ相談致さず候処、至極賛成に付き充分尽力致すべしとの事にこれ有り候。去り乍ら当分新任にても講義立案等に世話しく候。差したる事も出来申す間じく、閑暇出来候上は、勿論原稿を供し候事等に勉強致すべきとの事にこれ有り候。右御報の爲め一翰を呈し申し候。拝具

十八日

陳重拝

井上先生坐下

41 三浦悟楼

(1) 明治(二十二)年八月七日

大暑の候、益御勇健賀し奉り候。然れば、今度哲学館の目的御定古来の由にて、主意まで御寄送下され篤と拝見候処、至極御同感にこれ有り、深く賛成の事に候。今度学習院教育の儀に關し、奏問上裁を蒙り御一覽下されたく、其の意^旨(畢)竟御意見の旨趣に外ならず候。右貴答旁、此の如くに御座候。拝具

八月七日

三浦悟楼

井上先生

42 村上專精

(1) 大正(五)年二月十日

貴書拝見、賢弟円成氏御逝去誠に驚き入り候。拙者昨夏越後に参り深沢村迄参り候えども、行違ひありて御面会申さず候。今度の訃音実に驚愕の至りに候。本年は一月早々学停に参り、去る四日帰宅して御近火の事も家族より聞取候様の始末に候。御賢弟の御逝去は、定めし貴殿に取ても御愁傷の至りと拝し候。先は答礼旁々御悔み申上げ候。勿々頓首

二月十日

村上專精

円了博士座下

「差出人住所

東京市小石川林町三十一 村上專精」

(2) 年月日不明

前略 御免下され候。陳れば小袖實際繁務根柢候に尽き候間、貴館出席御断り申したく、右直接に申上ぐべきの間、兩日は境野君に拙し事情開陳方依頼致し置き候処、貴台には申上げ呉れざる由、先日授与式の時承り候次第

に御座候。今又夫れ断り申し候も如何と存じ候えども、余り繁多にして協力も□万候間、何卒暫時にても貴館の方御免蒙りたく、此の事情突然の様にこれ有り候えども、安藤君には数々申入れ置き候次第に御座候間、悪しからず御許容願上げ候也。

井上博士座下

村上專精

43 柴四朗

(1) 五月九日

時下益御清廉御存じ居り拝賀し奉り候。然れば明後十一日午後四時より牛込求友亭に於て小集相催し候間、何卒御綵会御臨席下され度く待ち奉り候。

五月九日

東京電報社 柴四朗

井上円了様

44 森有礼

(1) 明治(二十)年三月二十九日

今般、当省選の中学校師範学校用倫理学教科書草案脱稿致し候処、尚諸家の批評を仰ぎ、訂正の上、公刊致すべき見込みに付き、仮出版に附し候間、忝部御送附に及ぶの条、御批評下され度く、此の如く御依頼旁貴意を得候也。

三月廿九日

森文部大臣

井上円了殿

追て倫理科の教方は、最初道德義務を手近く講述したる書(例えば松田正久次郎氏道德学)を用い、これを習熟したる後、今回改選倫理学教科書を課するべし。只々此の如く念の為め申し添え候。

45 吉田晩稼

青咳謝恩候。頓首

四月二日

吉田晩稼

井上円了殿侍史

(1) 明治(二十)年九月十四日

来る十六日貴館開館式御執行に付き、御案内を蒙り有り難く拝謝し奉り候。然るに同日より野生□□地方へ遠発途いたし候間、遺憾ながら拝趨を得ず此の段御答え迄此の如くに御座候。頓首

九月十四日

吉田晩稼

井上円了先生

(2) 四月二日

未接 葉間に候えども拝呈仕り候。益御清適啓賀し奉り候。然れば、昨日は花墨拝見仕り候。命ぜられ候書名類(は)拙書草々上げ申候。菓資金として沓円御恵贈厚意拝受仕り候。其の内拝

46 莊一郎

(1) 十一月十五日

拝啓 秋冷の候、益御清適賀し奉り候。陳れば昨年来、荆妻病氣に付いては屢御尋ね下され候、御庇(蔭)を以て近來大分快方に赴き候間、聊か祝意を表する為め、餅沓重呈上仕り候に付き、御叱留下され候えば、本懐これに至りに存じ奉り候。此の段貴意を得たく。草々敬具

十一月十五日

莊一郎拝

井上様

47 渡部国武

(1) 七月五日

海陸御滞り無く御帰朝の由承りながら、慶事増集御無沙汰仕り候処、却て御訪問を蒙り悌礼の至り、昨日は至急取調べを要する事これ有り、一切来客謝絶候様申付け置き、甚だ残念仕り候。其の内御託び参館仕るべく候。

今回御巡遊は、宗教的に関し候様にも承り候えども、社会全体の御觀察、且つ哲学的御新徳拝聴いたしたく相樂み居り申し候。御留守中憲法頒布も相済み、国民政治熱もよほどにて、度々登り候様に見受け候えども、来年の結果に困り、また例えモンゴリアンには憲法政治行なわれずとの人権論、西哲中に起り申すべく候やと窃に苦心いたし候事に候。鳥渡御託び迄。余は拝晤に譲る

七月五日

国む〔武〕

井上学士御侍史

(2) 十月四日

寒冷の候、万福御起居謹賀し奉り候。先頃は御枉駕下され、且つ御書面下され候際は、感冒半面痛にて平臥いたし居り、御答遅々御相□下されたく別紙さし上げ申し候間、御領収下されたし、はたまた仏教活論も、はや大概御脱稿相成るや、屈指相待ち居り申し候。何とぞ御鞅掌一日も早く社会へ御示し成されたくと存じ奉り候。社会へ出し候上は、なるべく是非当否の論紛然相起り、数年の後相定り候程の感覚を僧俗間に与へたしと希望仕り居り候。さし急ぎ此の段のみ、余は拝晤に相譲り申し候也。

十月四日

国む〔武〕

井上学士御侍史

48 渡辺洪基

(1) 明治二十二年十一月十三日

本日哲学館移転并に郁文館開校式御執行相成り候に付き、午後一時より罷り出さずべく□易辱く□申し候処、よんどう扱なき差し支えこれ有り其の儀も及び難く欠礼御断り申上げ候。尚其の内参館致すべく悪しからず御承引申すべく候。拝具

廿二年十一月十三日

渡辺洪基

井上四了様

49 セイ正・公□□

(1) 十二月二十六日

拜見 弥いよいよ二十七日に御きまりの由慶賀し奉り候。御ひろめは成されずの事、尤も適切な儀と存じ奉り候。御転宅旁万々御多用拝察候。年内は時日もなく□御伺もせず候えども、春になり候はば、同御慶伺いたしと葉(葉)

居申し候。尤も何□御用とて御座なく候□□□存じ奉り候。右申し上げた。拝具

十二月廿六日

セイ正

井上学士様

公□□

三 その他

2 青応相拙 宛先欠如

1 大滝伝十郎（中頸城郡教育長） 井上円成宛

(1) 六月二十六日

啓上 愈御安康賀し奉り候。陳れば井上博士北越巡遊に就ては、中頸城郡旭村大字梶組合立旭高等小学校に於て一時の御演説を仰ぎたく候間、御誘合せの上成るべく日曜日に御出席下され候様、随分貴下より御^{マツ}計らい下され候。此の事広告に伝わり申込むもの也。

第六月廿八日 中頸城郡第五区 教育会長

大滝伝十郎

井上円成様

(1) 八月尽

過日御来訪成し下され、久々にて拝晤大慶に存じ奉り候。其の節御命示の元祖像[□]甚だ蕪文に候えども、別帋の如きものにて御用に相立ち申すべく候哉。とにかく貴覧に入れ奉り候。尚お考えも在らせられ候はば、開示下されたく、且像上に浄写にても致し候儀に候はば、其の料帋寸法御示し念上候也。不詳

八月尽

青応相拙

3 平田東助 林権助・鈴木馬左也宛

(1) 八月四日

拝啓 陳れば国家学会雑誌原稿、兼ねて御約束致し置

き候続き、左に差出し候間、御落手下されたく存じ奉り候。頓首

八月四日

平田東助

林権助殿

鈴木馬左也殿

4 穂積陳重 哲学書院宛

(1) 五月二十一日

昨年法典論発売の砌、大学并に高等中学学生には特別を以て割引売却のこと云々、委細承知致し候。然るべく御取計い下されたく、右御頼み申入候也。

五月廿一日

穂積陳重

哲学書院御中

5 村上專精 井上円成宛

(1) 年月日不明

拝答 益御清栄の条賀し奉り候。陳れば拙者朝地巡廻の件御申越し相承り候えども、昨今は拙者数年来の志願仏教史編輯の爲め、数名雇入れ必至に勉強中、且つ東京市内も同盟会拡張演説の爲め、此の頃処々小集会を催し、演説出席の依嘱これ有り候。旁々以て朝地出張は今般の番御免相成りたく、此の段御答申し上げ候也。

村上專精

井上円成殿

6 福沢諭吉 真浄寺宛

(1) 明治二十六年三月十八日

拝啓 陳れば今朝時事新報の広告を見れば、哲学〔書〕

院の発行朝家の御為と申□□、福沢と小栗栖と問答云々の言あり。右は過る頃小栗栖殿が拙宅にて説法の時に、老生と何か話したることを記したるものならん。其の説法の当分草稿やうのものを御示し下され候えども、是れは間違なり。か様の書きものを世に公にするなどは御無用下されたし、いよいよ問答となれば老生も篤と其の時に話したる趣意を明にせぬばならず、此の草稿は誰れが認めたるか、老生の思ひ又発言したる処とは。大いに齟齬せり云々と態と申上げ候は、□て御記憶の義もこれ有るべく候。然るに今朝の新聞広告には公然これを記したる。甚だ面白からぬ次第なり。就ては右出版書は早々改め両翁閑話は間違なりとの次第を、更に広告して出版したる書も、発売差留め候様御取計い願ひ奉り候。若し或は御不都合ならば老生の名を以て、彼の問答は悉皆うそなり。府東野人の語なりと広告致し候ても苦しからず。二者の中、何れにても宜敷方に致すべく御都合早々御返

辞下され候。右要件のみ申上げた。勿々謹言

〔明治〕二十六年三月十八日 諭吉

真浄寺様

尚以て本文の義は、最初より分り切たる事なり。故に此の方より念の爲め最初に申し置きたるに其の甲斐もなく、今に爲りてこれを出すとは、実に人をして厭はしむるものなり。小栗栖殿は自からこれを知るや知らずや、誠に智恵のない話と存じ候。以上